

ヘンデル：オペラ『リナルド』 HWV 7a



ヘンデル
トーマス・ハドソン(1701～79)の肖像画(1748)

若きジョージ・フリデリック・ヘンデル (1685～1759) がロンドン・デビューを飾ったのが、十字軍のエルサレム攻囲戦を描いた大スペクタクル『リナルド』だった。

◆あらすじ

11世紀末、聖都エルサレムはイスラム教徒の支配下にあったが、これをキリスト教世界に取り戻そうと十字軍が派遣された。しかし敵の固い守りに遭って攻めあぐねていた彼らは、勇士リナルドに応援を求め事態の打開を図る。

第1幕 十字軍の総大将ゴッフレードとエウスタツィオ(ゴッフレードの弟)、アルミレーナ(ゴッフレードの娘/リナルドの恋人)のいる本陣へリナルドがやってきた。総大将は、勝利の暁には娘と勇士の結婚を許すと約束し一同

の士気は上がる。そこへ敵将アルガンテが現われ一時休戦を提案してきた。

魔女アルミーダ(アルガンテの恋人でもある)は、十字軍からリナルドさえいなくなれば形勢逆転できると踏み、まずは彼をおびき寄せ^{おとり}てアルミレーナをさらって行った。リナルドはアリア「**風よ、嵐よ、貸してくれ Venti, Turbini, prestate**」で彼女の奪還への断固たる決意を歌う。

第2幕 リナルド、ゴッフレード、エウスタツィオの3人は、魔法使いの知恵を借りようと海路を進む。そこへセイレーン(海の精、人魚/アルミーダの手下)たちが現われてアルミレーナの行方を知っているとそぶくと、リナルドはその口車に乗せられてセイレーンに付いて行ってしまった。

魔女アルミーダの宮殿では、幽閉され嘆いているアルミレーナに敵将アルガンテが惚れてしまった。わが身の運命を嘆くアルミレーナの歌うアリアが「**私を泣かせてください Lascia ch' io pianga**」。策略にはまって別室にいたリナルドには、アルミーダが惚れてしまう。魔女はアルミレーナに変身してリナルドを誘惑するが、彼を落とすことはできない。そこへアルガンテが現れ、アルミレーナと思ひこんで口説き始めた。魔女の姿に戻ったアルミーダが恋人の浮気をなじると、彼は逆切れして二人は仲違いする。激怒したアルミーダのアリア「**戦いを仕掛けて勝ってやる Vo' far Guerra, e vincer voglio**」では、ヘンデル自身もチェンバロ・ソロで腕前を披露したことだろう。

第3幕 ゴッフレードとエウスタツィオは魔法使いに魔法の杖を譲り受ける。魔女アルミーダはアルミレーナに刃を向け、リナルドが自分の恋人にならなければ彼女を殺すとリナルドを脅すが、そこへゴッフレードとエウスタツィオが現われて、魔法の杖でアルミレーナを取り戻した。勇士にふられたアルミーダはアルガンテの陣に現われ二人は^{おとり}鬨りを戻す。

両軍激戦の末に十字軍が勝った。捕虜として連れて来られたアルミーダとアルガンテもキリスト教に改宗し、大団円のうちにオペラは幕となる。

◆ヘンデルとオペラ・オラトリオ

ヘンデルと言えば後のオラトリオ『メサイア』が有名だが、オラトリオ(演奏会形式の劇音楽)に転身するまではオペラで活躍していて40曲以上を残している。彼の作品はバロック・オペラとしては現在最も上演機会が多く、ニューヨーク・メトロポリタン歌劇場やミラノ・スカラ座など有名な劇場でも頻繁に取り上げられるようになっている。

青年ヘンデルは故郷のハレ大学法学部で学びつつ地元で教会オルガニストを務めていたが、18歳のときドイツで唯一公開のオペラ劇場があったハンブルクに赴き、最初はヴァイオリニストとして、やがて作曲家としても活動するようになる。

21歳になると、スペイン継承戦争(1701～14/血統の途絶えたスペインの王位をフランスのルイ14世が狙い、オーストリアなど諸国が反対した)で親仏・親奥に割れて混乱するイタリアに単身乗り込み、どちら側の台本にも音楽を付けてオペラやオラトリオ、室内カンタータなどを作り頭角を現す。

そして、英国王を継承する予定のハノーヴァー選帝侯ゲオルクに「**楽長**」——すなわち英国で次に王位に就くゲオルク侯の前宣伝を行う音楽家(つまり広報官)、またおそらくは立場を利用して宮廷や政治家の輪に入って動静を探る情報官——として雇われることになった(1710年6月)。就任後すぐ秋にイギリスに渡ったヘンデルは、さっそく翌1711年初めに次期国王の前宣伝オペラ『リナルド』を上演して広報官としての役目を果たす。

◆『リナルド』作曲と初演

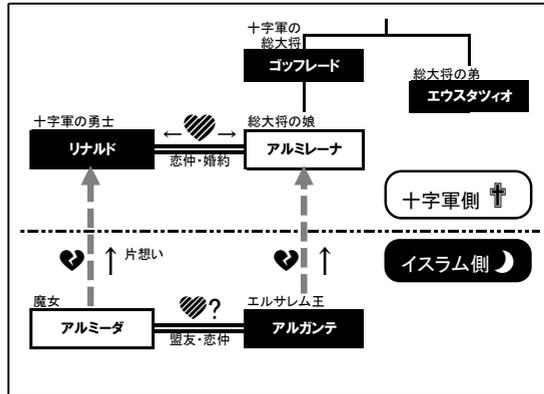
原作と台本：台本の元になったのは、トルクワート・タツ(伊 1544～95)の『解放されたエルサレム』という、第1回十字軍にまつわる奇譚を集めた長編叙事詩だった。

この中ではリナルドのほか、ガリラヤ公タンクレディ、彼を愛したアンティオキアの女王エルミーニア、彼が愛した異教徒の女戦士クロリンダ、魔女アルミーダなど多彩な人物が登場し、クラウディオ・モンテヴェルディ(1567～1643)などが題材としている。だが実在したのは総大将ゴッフレードとタンクレディだけで、その他の登場人物は空想の産物だった。この奇譚集をもとに、ロンドンの女王劇場支配人アーロン・ヒル(1685～1750)がシナリオを書き、それをジャコモ・ロッシ(伊 生年不詳～1731頃没)がオペラ用の台本に仕立てた。

作曲と初演：伝記作者マナリングが、ヘンデルが『リナルド』をわずか2週間で作曲したと書いたのは誇張かもしれないが、秋の渡英後翌2月に初演しているので、作曲に要したのが短期間だったことは間違いない。

初演は1711年2月24日、都心ヘイ・マーケットの女王劇場で行われた。リナルド役に著名なカストラートのニコロ・グリマルディ(通称ニコリーニ)、敵将アルガンテにイタリア時代から知るジュゼッペ・マリア・ボスキなどスター歌手を配し、大編成のオーケストラも動員した初演は大成功を収め、15回の連続上演を果たしている。

オペラ『リナルド』の主要な人物関係図



◆バロック・オペラの形式と内容

ヘンデルの作品は、イタリアのオペラ・セリアの形を取っていて、話を進めるレチタティーヴォと情感を歌うダ・カーポ・アリアが交代しながら進む。ダ・カーポ部では、自由な装飾を加えることで歌手の技術や独創性を披露できる。それぞれの「場(Scena)」は数人の会話から始まり、見せ場となるアリアを歌った人物は退場するというルールもあった(退場アリア)。最後は「リエート・フィーネ」(ハッピー・エンド)で終わり、全員の合唱で大団円となる。話が込み合ってまとまりがつかないときは、上空や上層階から吊りものや階段を使って神や女神が降りてきて(「デウス・エクス・マキナ」=機械仕掛けの神)、無理やり解決をつけてしまうこともしばしばだった。

また当時の劇音楽は、政治や思想の主張を伝えるツールでもあった。同時代のことを直接描くのではなく神話や歴史になぞらえて(アナロジーで)、王様や権力者なら自分の権勢を誇示したり、正統性を訴えたり、反対勢力・野党なら現体制・与党をこきおろしたりする。

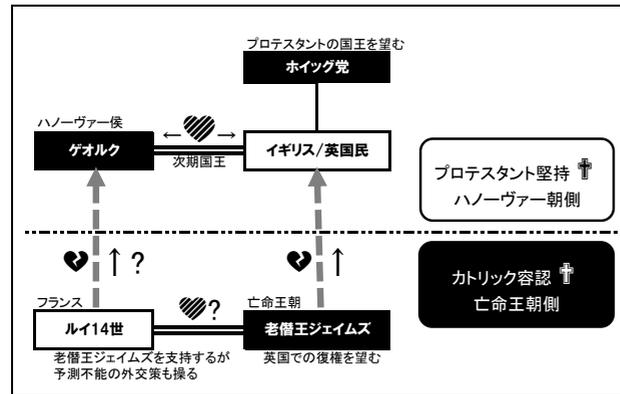
◆イギリスの王位継承問題 ~ 『リナルド』作曲の背景

イギリスでは議会と対立しカトリックに寛容と見なされたチャールズ1世が処刑され(1649, 清教徒革命)、厳格なプロテスタントのクロムウェル時代を経て、一度は王政復古(1660)したものの、カトリックのジェームズ2世は議会と対立して大陸に亡命し(1688, 名誉革命)、以後プロテスタントの国となっていた。

しかし王家の血を引くプロテスタントの国王はアン女王が最後で、遠縁のハノーヴァー侯ゲオルクが英国王となることが内定していた。ただ、たとえカトリックであっても直系王族(ジェームズ2世の子孫)の方が望ましいという意見も根強く残っていた。

ゲオルク侯としては自らイギリスに赴いて世論に触れ、人気策も打ちたかったろうが、アン女王としてはまだ自分が健在な時点で遠縁の後継者がロンドンで立ち回るのを見たくなかったのだから、ゲオルク侯自身の来英は拒んでいた。その侯に代わってロンドンにやってきたのがヘンデルだったのだ。

1710年頃のイギリスと次期国王候補たち



◆『リナルド』の政治的メッセージ

『リナルド』の筋書きはこうだ：①聖都エルサレムは異教徒に支配されているが、これを②十字軍・キリスト教側に新たに加わった若き英雄リナルドの力で解放する。③彼とアルミレーナも結ばれる。

これをゲオルク侯の主張に当てはめると：①英国ではプロテスタントの王家が間もなく途絶えるため、カトリックの亡命王朝が復権するの懸念が残る。しかし②プロテスタントの新国王が来れば新教の体制は安泰、③新国王のもとで英国も英国国民も安寧と幸福を得られる。

……という主張が浮き上がる。オペラと現実が重なる部分に注目したい。こうした含意を知っていればより重層的に作品を楽しめるが、もちろん大仕掛けの娯楽作品として楽しむことも可能だ。多様な楽しみ方ができるのもバロック・オペラの魅力だ。

◆『リナルド』の音楽と舞台

ヘンデルは短い作曲期間に、イタリア時代の諸作品から多くの転用・改作を行い、他人のアイデアも生かして全曲をまとめている。新作に限らず過去の蓄積の中から自在に選ぶことができたため、多彩な曲をふだんに盛り込んだ作品となった。たとえば前述の「私を泣かせてください Lascia ch' io pianga」はオラトリオ『時と悟りの勝利』(1707)からの改作、といった具合である。

器楽もフラジオレット(ソプラニーノ・リコーダー)、フラウト(アルト・リコーダー)2、オーボエ2、ファゴット、トランペット4、ティンパニ、第1~3ヴァイオリン、ヴィオラ、通奏低音という華やかな編成だ。

視覚上も娯楽的だった。エルサレムの城砦、セイレーンたちが幻惑するシーン、魔女の馬車を牽く竜は火を吐き、魔法をかけるときは煙幕を張り、総大将と弟は魔術師に会うために険しい山を登る。アルミレーナが恋人の居場所を鳥にたずねるシーンでは本物の鳥が放たれたという(終演まで捕まえられず、ずっと鳥の啼き声が邪魔だったという不満の声が残されている)。

最後は戦闘と勝利から自然にハッピー・エンドが導かれる。当時ありがちだったデウス・エクス・マキナのような無理な細工もなくすんなり呑み込める結末も、現代の『リナルド』人気の要因と言えるだろう。

(みかじり ただし・ヘンデル研究/オラトリオ研究)